

第16回夏期セミナー要旨（1994年7月2日）第1日

## 異端と正統の間で

——ワイルドの伝記から——

酒井 敏

（東京家政学院名誉教授）

“The two great turning points in my life were when my father sent me to Oxford and when Society sent me to prison.” (*De Profundis*)

私は昨年夏のセミナーで、上のような題でワイルドの生涯の『二つの重大な転換点』の内、前者のオックスフォード時代に関して、これまでの伝記がどのような取扱い方をしていたかを、主としてカトリシズムとの関連に於いて述べさせて頂きましたが、時間の関係で後半の方がやや粗雑になり、尻切れトンボになってしまいましたので、ここではそれをもう少し補足する意味で筆を執りました。

ワイルドの死没後100年になろうとしている今日までに公刊された伝記は、かなりの数にのぼっているようですが、大きく分けてその間に四つの段階があったと思われます。

その第一は、ワイルド自身とほぼ同時代に生きて、直接彼と交渉のあった人々で、主としてオックスフォードの後輩やその他の文人が書いたものです。具体的な名前を上げると R. H. Sherard, F. Harris, A. Ransome 等です。

第二の段階では、前者の Contemporaries が世を去った頃、即ち1930年代及びそれ以降に出版された評伝で、その中には Boris Brasol の *Oscar Wilde: The Man, The Artist, The Martyr* という浩瀚な大著や、ペンギン叢書にも入っている H. Pearson の *The Life of O. W.* などがあります。

そして、次に来るのが有名な R. H. Davis の編纂になる *The Letters of O. W.* 出版後の第三のグループですが、これは第二次大戦が終わって間もなく息子の V. Holland による『獄中記』完本の公刊と相まって、彼の伝記は固よりワイルド研究に大きな山を作りました。

このグループで注目したいのは『英国における有名な判例集』の著者 M. Hyde とフランスの美術評論家 P. Jullian による評伝です。この二人の内一方は法律家、他方は外国人ということで異色があるのは当然ですが、それ以上に前述の『二つの重大な転換点』の取扱いに新しいものが見られます。

さらに1970年から80年代に掛けて、最後のグループが出現しますが、その頂点に立つのはやはり R. Ellmann でしょう。実は彼の評伝の前にも、S. Morley, R. Shewan, D. Erickson, M. Nichols, K. Worth などの若手や女性の手になる伝記乃至評論が次々として出ていました。

私がワイルドの『二つの重大な転換点』、特にオックスフォード時代のそれにこだわるのは、これらの伝記を時代を追って眺めていると、その取り上げ方やその意味付けに著しい変化を感じるからです。そして、その変化は又ワイルドの文学や人間の評価とも関係して来るのではないかと思うからなのです。

私がこの変化を彼とカトリシズムとの関係に絞って考察することを試みたのは、従来のワイルド像がともすれば唯美主義のデカダンとしての面だけに光が当てられて、それ以外の面は看過されているとかねてより感じていたからですが、実は、時代と共に伝記の中でのカトリシズムとの関わりに就いての記述は目立って増えて来ています。

例えば、R. Ellmann は大著“O. W.”の前に出版した *Four Dubliners* という本の中で“Oscar Wilde at Oxford”と題し、専ら若き日のワイルドが友人達との交わりを通して、審美主義とカトリシズムとの間を揺れ動いていた様子を克明に描き出しています。その他 Cambridge 版の P. Raby の小著でも初期の詩と併せて Oxford 時代のワイルドの精神的遍歴をかなり詳しく記述しています。

こうした変化が何を意味するのか、私には残念ながらその明確な答えを出せる程の知識も洞察力も未だありませんが、ただワイルドを異端の世界に生きる「美の使徒」ということばだけで括ってしまうことに、常々疑問を抱いていた者としては、これは大変に結構な傾向だと思っています。

『ドリアン・グレイ』や『サロメ』の作者が、同時に『幸福の王子』や『わがままな巨人』を書き、『獄中記』で独特のキリスト論を展開し得た秘密は、彼の若き日の心の遍歴を辿ることで明らかにされるのではないかという気がします。そして、もっと言えばここから十九世紀末のデカダンスの持つ文明史的な意義も解明出来るのかも知れません。

序でですが、私はワイルドという人は飽くまでヨーロッパ文明の伝統の中に生きた人間で、従って、ある意味で彼が身をもって体現したデカダンスはヨーロッパの伝統への『回帰』と見えますが、このことは、いつか又改めて考えてみましょう。

(7th Apr. '95.)